

現代文化論序説

An Introduction to a Theory of Modern Culture

山口 隆介

Yamaguchi Ryusuke

要 旨

聖泉大学人間学部 2022 年度カリキュラム新設科目である「現代文化論」の意義と可能性について論じる。

2022 年度は以前筆者が担当していた「民族と宗教」という授業を下敷きに行なった。そのことを振り返り総括するとともに、2023 年度以降の「現代文化論」のありようについて思索し、模索する。

本稿で筆者が最終的に至る文化についての現時点での理解は、「文化的であるということは、科学的であり、政治的であり、そして根本において客観的である」ということである。このテーゼは、現時点では 2023 年度以降の「現代文化論」の授業の根本方針を示すものとなるであろう。

キーワード 文化 芸術 自然科学 知性化

1. 2022年度の「現代文化論」

筆者は2022年度より聖泉大学人間学部で「現代文化論」の授業を担当している。この授業は2022年度カリキュラムで新設された科目であり、一年生開講科目である。筆者は2017年度まで「民族と宗教」という授業を担当しており、その授業では民族と宗教というキーワードで人間と現代社会を考えるという講義を行っていた。「現代文化論」の開講初年度の授業は、「民族と宗教」から大枠を引き継いで始めたが、内容は途中から大幅に入れ替えて進めることになった。

「現代文化論」のシラバスにおいて提示した授業の概要および授業のねらいは以下のとおりである。

授業の概要

合理的思考のみで社会が成立するのであれば「宗教」は単なる迷妄として捨て去ることができる。しかし、現実にはそうではなく、またそのレベルでは必要であり、かつ合理的思考が現実獲得している制度や体制が取りこぼしているものを補う機能を果たすことすらある。合理から外れるが有用なものについて、根拠ある慎重な取り扱い方を探るといことがこの授業で教員・学生ともに行うべき作業である

授業のねらい

1. 宗教という宗教の自覚
2. 民族や普遍的理想という宗教の自覚
3. それらの現象を、自由な立場で見直すことのできるメタ視点の獲得
4. そのうえでどうしたらいいかを考える。

先に大枠を「民族と宗教」から引き継いだと述べた通り、「宗教」および「民族」という文化が授業で考察し、講義する対象である。より正確に言うと「民族」は「宗教」の一種、「民族」という「宗教」であり、それも含めて「宗教」という文化を論じるということをしている。しかしそれはもちろん、「宗教」を信じるということではない。「宗教」は自らの意思で受け入れた信念の体系という面だけでなく、かつ世代間継承される思考と行動の様式という面、すなわち文化といえる面も持つ。文化が、けっして合理的なだけではないが、実社会的には有用でありうるように（もちろんあらゆる面で有用であるわけではなく

偏見や差別の温床にもなりうるので改善すべき点は常に多々ある)、宗教も、合理的思考の外にはあるが実社会的な有用性を発揮しうる。そのことを宗教および民族という宗教に縛られることなく理解することで、宗教と民族の活用法とその限界を知り、「**根拠ある慎重な取り扱い方を探る**」ということを「現代文化論」の授業でなすべき作業と設定した。

授業の準備中は、「民族と宗教」時に用いた内容を多く使いまわせるのではないかとも思ったが、実際に始めて見ると、新しい内容に入り込まざるを得なかった。それは、現代政治批判の性格がどうしてもこの現代文化論の授業にはあるためと言える。

そもそも、文化とは集団性を持ち、世代間継承される行動と思考の様式であり、それゆえに政治とは緊張関係にある。政治は、社会全体を政治が意図する方向に統合しようとする権力的な営みであるが、文化は政治からのほたらきかけには本来閉じている。政治からのほたらきかけに開かれているように見える場合は、それは最初から政治権力と集団的に連続しているからにすぎない。逆にいうそれまで社会の覇権を握っていた政治権力がたまたま自分たちと同じ集団、同じ文化に属する権力であったから権力に従順であった文化も、その権力がたとえば選挙で負け、自分たちと文化的に一致しない政治権力が登場した場合は、権力に対して敵対的となる。

一方、政治権力は、文化を背負っている政治権力もあるが、時として非文化的な権力、すなわち地域性や集団性を脱し、普遍性を志向する権力が立つことがある。そのような権力にとって文化は、その権力が志向する普遍的価値に合うかどうかで評価され、それに反するものとされた文化は、闘争の対象となる。現代は、人権や環境正義と言った普遍的価値のための全世界的な改革が進行中の時代である。また、環境問題や貧困の問題の深刻さは改革を避けられないものとしている。

「現代文化論」という講義は、現代という時代にあるべき文化の形の模索である。2022年度は宗教と民族のあるべき姿を探る試みとしてそれを展開した。しかし、2023年度以降はさらに新たな要素を含む必要があるだろう。それは芸術である。

2. 2023年度以降の「現代文化論」(予定)

芸術に対応する西洋語のおおもとはラテン語の *ars* (技芸) である。そしてこれは、自然に対する人工をも意味する。しかし、自然とは、意志を持った制作者、操作者がいないという条件下の状況に過ぎない。動物や植物が意志を持った制作者、操作者でないという留保のもとでなら、それは人間以前の状況となる。この場合、意志は、人間特有の知性を前

提とした欲求ということになろう。もちろん、知性ですら人間特有と言えるかどうか、現代ではあやしくなっている。しかし、あるかないかではなく、人間と同程度の文明を築くだけの知性を有する生物が他にいないか、と考えた時、石器文明に至った生物すら他にいないという事実から、人間が有する程度の知性は人間特有と言って差し支えないと思われる。

人間にとって、意志を持つことが必然である以上、純粋な自然というものはありえない。人間はただの自然の景観であっても、それを鑑賞物とみなし、その状態のまま保護しようとすることで、自分たちにとっての何かに変える。その時点で、自然には一切手を加えていなくとも、人間の意志がそこですでにはたらいっており、意志以前の自然はもうそこにはない。意志以前の自然があるとしたら、それは、意志以後の人間のパースペクティブにおいて、意志以前の未加工の自然として想定されるものでしかない。ちょうど、アリストテレスの形相質料論のパースペクティブにおいて、現実に見いだされるものはすべて形相と質料の複合体であって、純粋な質料は、それが確かに存在するはずであるにしても、認識者にとっては複合体の前提として想定されるものでしかないのと同じように。

その意味で、人間が存在し、そして人間が人間として、すなわち意志ある存在として世界内で生きていく以上、世界はすべて人工化される。すなわち、意志の前提となっている知性のもとに知性化される。この知性化が、主観化としてのみ捉えられるなら、知性化は自然にとって、すなわち意志以前、知性以前、人間以前の世界にとっては余計ものである。

しかし、人間はそのように知性化を余計ものとみなすことはできない。それは、単に、それが人間自体を余計ものとみなすことと同義だからではない。知性が余計ものであると考えることはできないからである。知性は、本質、ものごとの本来の意味を見出す能力である。すなわち、物が何であるかを、何として存在しているかを反復する能力である。すなわち、事実の反復が知性の本務であって、事実に対して事実にはないものを付加する、あるいは事実に対して事実にあるものを除去することは、知性の本務ではない。もし、そのようなことが起きたとして（むろん、このことはしばしば起こる）、そのことに誰かが気付いたとしたら、それは誤りと評価される。

ハイデガーは、事物存在、道具存在、現存在を分けたが、事物存在が単に存在すること、道具存在が現存在のパースペクティブの中で意味づけられて存在することを意味するのなら、事物存在は生物以前、道具存在は生物以後ということになろう。現存在 *Dasein* は、そこにある、ということで、存在が反復される場と捉えることができる。この存在の反復の中に事実は成立する。

人間以前の生物にとって、事物は生きるのに役立つか否かで意味づけられる。つまり、生物の身体にとってその事物がどのような存在であるか否かによって意味づけられる。すなわち、生物にとって世界は自分の存在＝生存、すなわち身体の保持に役立つ道具と、そうならない敵、有害物というマイナスの道具とに分かれる。身体がそれを決定する。人間の知性が作り出す人工物とはレベルが違うが、生物が存在している時点で、生物以前の事物のみの世界はすでに失われている。すなわち、自然は生物化を被っている。生物の持つ、知性を必ずしも前提としない欲求、根源的には「生きたい」「存在を持続したい」という欲求が、すでにしてパースペクティブを成立させる。

そのような欲求や、身体、身体の保持から自由な認識、そこにあるのが本当は何なのかを明らかにする存在の反復は、知性によってのみ可能となる。たとえば、筆者が本務校の「哲学」の授業でよく使うたとえ話だが、同じ岩がその上に這い登ることができるトカゲには足場となり、その岩に上ることができず進路を塞がれてしまうカメには壁となる。トカゲとカメにとっては、それが「岩」であるということが顕われていると考えなければならない理由はない。そのものはトカゲの身体にとっては「足場」であり、カメの身体にとっては「壁」である。トカゲとカメが「岩」を見出していることが確認できるのは、トカゲとカメがことばを持った時である。トカゲとカメが、自分たちの身体にとって意味合いが全く違うそれを同じ名称、たとえば日本語でなら「岩」と呼んだ時に、はじめて、トカゲとカメが、そこにあるそのものの本質を捉えているということが確認できる。トカゲとカメの世界は、ものの本質、ものの本来の意味、事実が顕れてくる世界であるということが確認できるのである。

これこそが、ことばの本務であり、したがってことばを生む知性の本務である。つまり、知性こそが、事実というもの、存在の反復というものを成立させる。

一般に、トマス・アクィナスによる真理の定義は、真理 *veritas* は知性と事物の一致 *adaequatio rei et intellectus* と和訳されることが多い。*adaequatio* は *adaequare* という動詞からの派生語で、*adaequare* は、*ad*+*aequalis*、すなわち等しいようにするということであろう。アウグスティヌスは、真理をもの *res* そのものとする。それは *res* が知性による反復の際、いかに反復されるべきかの基準であるということであろう。一方トマスは、反復が適切になされる、すなわち *res* に等しく反復されるということが *veritas* であるとする。トマスにせよ、アウグスティヌスにせよ、究極の真理は神そのものであり、したがって世界内で確認できる事実を超えたものまで *veritas* という語は含意している。しかし

ながら、日本語の一般的な語感として、*veritas* すなわち本当である *verum* ことという表現は、真理という語にはもちろん、事実という語にも書き換え可能な表現となる。その意味で、知性が知性外の実在物を知性内で等しく反復するということが事実の成立であるという見解をして、上記定義と矛盾をきたすものとは直ちには言えない。

話を戻そう。知性は事実を成立させる能力である。事実とは、知性外の存在の知性における反復である。そうである以上、知性外の世界に対し、すなわち知性以前の自然に対し、知性による知性化が余計のものであるとみなすことはできない。

知性化とは、自然に対しては人工化であるがそれは余計ものではなく、単なる主観でもない。そこにこそ客観的な事実が生じる。人工化が芸術であり、文化であるなら、芸術も文化もまた自然に対する余計ものではない。

少し、話が先に進みすぎた。「現代文化論」では、文化とは、自然に対する文化という位置づけである、すなわち自然に対する人工を文化とみなすというスタンスを、今現在、筆者はとっている。ゆえに、民族も宗教も、芸術と同じく文化の一面である。ひいては学問も文化である。文化を単なる主観、個別特殊なものとはみなさず、世界に対する人間の客観的反復を文化の本来とみなすことを筆者はしている。すくなくとも文化を創始した古代の人類は、自然の中に見出すことができない何かを作り上げているとは思っていなかったろう。美的な目的で装飾品や文様などを創作するときも、人間が有する美的感性（これは普遍的なものであれ、個人的なものであれ、すでにできあがっている以上、操作できないものであろう）という自然の反復を行っていると考えている（困難な例は、部族のルールにしたがって、自部族と他部族を区別するためのできあがった文様等である。差異を作ること自体が目的のものは当人たちの自覚においても、明瞭に人工物、すなわち本来なかったものという意味での人工物かもしれない）。

したがって、文化とは人間にとっての自然である。自然に反する文化は、客観的真理に反しており必然性を持たず、したがって永続性を持たない。このように考えるなら、学問、特に自然科学をも、人間の文化の一面と捉えることができる。そして、芸術のような感性主体と見える営みも、自然科学と同じく自然の知性化の一面と捉えることができる。

筆者が自然と知性を連続的に捉えていることで、自然を道徳化していると解釈する読者もあるかもしれない。そのことについて付言しておく、筆者は明確な答えは持っていないが、問題意識は持っている。自然は人間の経済的な都合通りにできていないのと同様、道徳的な都合通りにもできていない。自然に見出せることがすべて道徳の標準となりうる

わけでもなければ、自然には道徳的に不都合なことがまったく見出されないわけでもない。つまり、われわれは現実の自然にさかのぼっていくのではなく、知性の中に自然のあるべき姿、自然のより完成された姿を見いだすべきである。たとえば、現代の環境保護思想が、自然環境の保護を主張するものであっても、45億年前の灼熱の原始地球の自然環境を標準にはしないように。もちろん、知性の中に自然の完成形を見いだすという図式は、きわめて問題的である。多数存在する候補のいずれが真の完成形かについて人類的な合意に至るもの困難であれば、たとえ合意に至っても、それに欠陥がないかは絶えず点検されなければならない。

さて、予定の紙幅がつつつつあるので、本稿の結びに移りたいと思う。今、自然と道徳の話が出てきたが、政治もまた文化の一面である。政治を行なう生物は、人間以外に存在しない。トマスによれば、人間は社会的かつ政治的動物である。人間は、自由人の統合と協働を実現するための統治を、共通善 *bonum commune* すなわち全員にとっての善を目的として行うことができる。これは人間が自分たち自身を対象とした知性化である。

政治は政治家だけが行うものではない。一般民衆、一般市民の中の個人が、社会全体に対して声をあげることはすでに政治である。声を挙げないという選択すら、社会はこのままでよい、あるいは成り行きに任せるという選択であって、きわめて政治的である。人間はすでに人間どうしが仲間として共に生きる社会を作ってしまった。そうである以上、これをどう運営するかという仕事から縁を切れる者はいない。

文化的であるということは、科学的であり、政治的であり、そして根本において客観的である。そのことを絶えず再確認しつつ、現代という時代における具体的な生き方はどう落とし込んでいくか、また上記テーゼに含まれるさまざまな側面とは何かを追究することを、2023年度以降の「現代文化論」のテーマとしたい。

